

Title	東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科における平成 27年度外来初診患者の臨床統計
Author(s)	北村, 佳也; 三條, 祐介; 市島, 丈裕; 齋藤, 寛一; 河 池, 誉; 酒井, 克彦; 澁井, 武夫; 佐藤, 一道; 野村, 武史
Journal	歯科学報, 116(3): 239-239
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/4014">http://hdl.handle.net/10130/4014</a>
Right	

## No.21：東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科における平成27年度外来初診患者の臨床統計

北村佳也, 三條祐介, 市島丈裕, 齋藤寛一, 河地 譽, 酒井克彦, 澁井武夫, 佐藤一道, 野村武史 (東歯大・オーラルメディスン口外)

**目的：**日本は超高齢社会にあり、さらに加速的に進行すると考えられる中、歯科に訪れる患者の疾患は年々多様化している。今回我々は、東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科における平成27年度の初診来院患者臨床統計を示すことで患者背景の相違を把握し病院歯科・口腔外科の役割を再考するとともに、超高齢社会で多様化する疾患への管理や対応の必要性、その在り方、方向性について検討することとした。

**方法：**平成27年4月1日から平成28年3月31日までの一年間に当院歯科・口腔外科を初めて受診した患者のみを対象とし、再来初診等の保険制度上の初診患者、救急外来受診患者は除いた。疾患の分類は日本口腔外科学会調査企画委員会が作成した実績調査票に準じ検討を行った。

**結果：**期間中に受診した初診患者数は5,014人であり、そのうち男性は48%、女性は52%であった。年齢分布は0歳から110歳まで、平均年齢は51歳であった。年齢別では70歳代が17%と最も多く、次いで60歳代が14%であった。60歳以上は42%を占めた。来科地域は市川市が62%、船橋市が9%であった。県別では千葉県が84%、東京都14%であった。

受診経路は紹介患者が91%を占めた。昨年と比較し、直接来院は757人減少し、院内紹介は393人増加した。疾患別では、歯の疾患が42%、口腔粘膜疾患が7%、顎関節症が5%であった。初診患者のうち、医学的問題点を持った症例は3,121例あり、62%を占めた。最も多い疾患は高血圧が21%、次いでがんが15%であった。院内患者の治療内容は周術期口腔管理が29%を占め、次いで慢性期疾患の口腔ケアが24%であった。

**考察：**今回の調査で当院を受診する患者の高齢化を認め、それに伴って基礎疾患を認める患者も増加が認められた。さらに今年度より改定された初診時選定療養費によって、より当院の治療を必要とする患者に医療を提供できたと考える。また、院内各科との関係性も深まり、より密な連携が取れていると考える。さらに当院は昨年度、地域医療支援病院に認定され、院内各科だけでなく、地域医療機関との連携を密にとっていることが大きな特徴である。今後、院内はもとより、地域の医療機関との連携をさらに密なものとし、口腔外科とオーラルメディスンの専門性に加えて全身管理の充実を図りながら診療の質の向上に努めていきたいと考える。

## No.22：東京歯科大学口腔がんセンターにおける早期舌扁平上皮癌に対する臨床的検討

齋藤寛一<sup>1)</sup>, 小坂井絢子<sup>2)</sup>, 池田雄介<sup>3)</sup>, 関川翔一<sup>2)</sup>, 河地 譽<sup>3)</sup>, 大金 覚<sup>1)</sup>, 佐藤一道<sup>3)</sup>, 野村武史<sup>3)</sup>, 高野正行<sup>2)</sup>, 片倉 朗<sup>4)</sup>, 柴原孝彦<sup>2)</sup>, 高野伸夫<sup>1)</sup>, 橋本和彦<sup>5)</sup>, 田中陽一<sup>5)</sup>  
(東歯大・口腔がんセンター)<sup>1)</sup> (東歯大・口腔顎顔面外科)<sup>2)</sup>  
(東歯大・オーラルメディスン口外)<sup>3)</sup> (東歯大・口腔病態外科)<sup>4)</sup> (東歯大・臨床病理)<sup>5)</sup>

**目的：**一般にStage I - II 舌扁平上皮癌の治療成績は5年生存率90%程度で、予後は比較的良好である。一方で、予後不良例が存在することも事実であり、その理由として頸部リンパ節および遠隔への転移がほとんどを占める。そこで、予後不良因子を予測するために後発頸部リンパ節転移のリスクとなる因子について検討したのでその概要を報告する。

**方法：**2010年1月から2015年9月の約5年間に東京歯科大学口腔がんセンター(以下 Oral Cancer Center: OCC)で治療を行ったStage I - II 舌扁平上皮癌一次症例57例を対象とした。対象症例57例について、年齢、性別、T分類、予防的頸部郭清術の有無、組織学的分化度、筋層浸潤の有無、腫瘍の深達度、脈管浸潤、神経周囲浸潤、リンパ管浸潤の有無について、後発頸部リンパ節転移との関連性および予後との関連性に対する検討を行った。

**結果：**5年累積生存率はStage I 95.2%、Stage II 94.4%であった。後発頸部リンパ節転移を認めた症例では、有意に予後不良であった。舌の深達度6 mm以上では有意に後発頸部リンパ節転移がみられ

た。臨床的因子と後発頸部リンパ節転移についての多変量解析の結果では、舌深達度6 mm以上とリンパ管浸潤が後発頸部リンパ節転移のリスク因子であった。

**考察：**本検討では、Stage I - II 舌扁平上皮癌症例の累積生存率はStage I 95.2%、Stage II 94.4%であり、他施設の報告と比較し、ほぼ近似しており、良好な治療成績であった。頸部リンパ節への後発転移は25%に認められたが、本邦における他施設の後発転移率(20.8%-30.9%)と同程度であった。後発頸部リンパ節転移と臨床的因子を検討した結果では、舌深達度6 mm以上、リンパ管浸潤があることがリスク因子として示された。舌深達度6 mm以上では予防的頸部郭清術を考慮すべきと考える。6 mm以下で予防的頸部郭清術を行わない場合も厳重な経過観察が必要である。OCCでは、プロトコルを作成し経過観察と合わせ定期的な画像検査を行い、術後1年以内では月に1度のCT検査を行うなどの検査時期を定め、小さい病変も見逃さないための厳密な経過観察を心がけている。